
ONE PIECE 鬼としての本能

当たり前の日常を！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 鬼としての本能

【コード】

N7499P

【作者名】

当たり前前の日常を！

【あらすじ】

俺はブラッド・レース

航海中に嵐がきて 溺れているところを

麦わら帽子の少年と腹巻き剣士に助けもらった

これが こいつら仲間との出会い

第一話　く出会い

今　俺　ブラッド・レースはボートで航海中……
ところで皆は知っているだろうか？

「死ぬ」というのは必ず何らかのアクションや理由等が
あつたりするのだが……

まさか今乗っているボートに穴が開くと誰が思うであろう
初っ端第一話でこんな物語を作りやがった作者に文句を言いたいと
ころ

だが今は　命　つまり安全第一と言うことで食料が積まれている樽
を水の進行を防いでいる
だが……

「はあ　この状況で……」はい　俺は基本ついていません
ここ重要　テストにでるよ！

某不幸少年程ではないがな
穴を塞いでるのは良いのだが少しずつ水が出てきている
それはまだいいでしょう

大渦が目の前でグルグルと……さあ　なんだこれ！？
作者は俺を殺したいのか？　俺に恨みでも？

第一話で作者にこんな苛められて私嬉しいですよはい
では大渦へ……GO！！

「……い……じょ……ぶ……！！」
ん？誰だ？

俺は生きているようだっ

全身ずぶ濡れの様でヒンヤリと冷たい

「おい大丈夫か？」

麦わら帽子と腹巻きの二人組が俺に声をかけていた
俺は起き上がり最初に浮かんだ質問をする

「お前らが助けてくれたのか？」

「ああ！良かったな」 ゾロが海へ潜ってメシ探しに行かなかつたら
お前死んでたぞ？」

麦わら少年が笑いながら分かりやすく説明してくれた

どうやら俺はついてないことばかりではないようだ

「助けてくれてありがとう 俺の名前はブラッド・レース」

「よろしくな レース

俺はモンキー・D・ルフィ レースを助けたのがこいつゾロだ」

「・・・ロロノア・ゾロだ」

「よろしくな・・・にしても今どこに向かってんだ？」

「あてがないんだよなあ」

「船長のお前が航海術を持ってないってのはおかしいんじゃないか
？」

「まあ大丈夫だろ！なんとかなるって」

「船長？」

「ああ 俺達海賊だ！」

「へえ海賊かあゝ 楽しいか？」

「ああ 楽しいぞ これからもっと楽しくなるぞ！

お前 仲間にならねえか？」

「いいぜ 俺は恩は返す男だからな」

「やったー！三人目だ！」

「はあ・・・船長 町見えてきたぜ」

「ホントか！？ ゾロ！レース！メシだ！」

俺はついノリでこの海賊団に入ってしまった・・・

まあいいだろう 遊んでやるか

第一話　～出会い～　終了

第二話　くオレンジの町く

俺らは上陸して町を歩いている

「さて　メシ屋はどこかなあ」

「お前はメシのことしか考えてねえのか？」

「いつものことだ　気にすんな」

ゾロが見るところによるといつも通りらしいこんな船長を持つと大
変だろうな・・・

すると　追いかけてられる女と追いかける三人組がこちらに走って
くる

「はあ・・・ゾロ　ルフィ　どうする？」

「助けてメシ屋教えてもらおうぜ」

「しょうがねえなあ　付き合っつてやるよ・・・」

やる気満々のルフィとめんどくさそうな顔をするゾロ

「悪い　初陣つてことで俺に任せてくれ」

「わかった」

よしいくか・・・

「はいはいそこまで女に三人で寄つてたかってそうゆう趣味です
かお前ら？」

俺はバカ三人組みと女の間立ち無駄だと思つて言う

「あ？邪魔すんなどけ！」

ですよ

「邪魔すんなら・・・死ぬ！」

剣を振り上げるバカ一名を無視して俺は

「ねえ　名前なんて言つんだ？」

「へ！？」

「無視すんな！」

剣を振り下ろすバカに俺は右手を前に突き出しまともに受ける

当然ひしゃげる音ともに手が半分に裂ける

「レースー!!」

「・・・!?」

ルフィとゾロは驚いているだれも剣に対して手を突き出すなんて自殺行為しないからだ

「はぁ・・・」俺は溜息をつきバカに近付いて左手でアッパーを顎にヒットさせる

「まず一人つと」

「!? 死ねえええ!!」

アッパーの勢いで飛んで回転し後ろに回り込んできたバカの頭に蹴りをヒットさせる

「う うわ! せ 船長!」

「覚えてろ!!」

「ふう 疲れた」

走り逃げていくバカ共に俺はもう一度聞く

「ねえ 君なんて言うんだ?」

「へ!? え えつと ナミ」

「ナミか よろしく」

「ね ねえその・・・手・・・」

「え?手?」

「あれ?治ってる?」

「気のせいだろ」

右手を見せるとナミは驚いていた

「ナミ メシ屋ここらへんにしらねえか?」

「あ それなら私のご馳走するわ」

「マジか!サンキュー」

「おお！うめえ〜！」

「ああ なかなかのもんだ」

「ふう でどうするよ ルフィ」

ゾロがルフィに質問する

「ふ？ふが！ふん！」

「食いながら喋んな・・・」

「うーんどうしよう」

「あ 俺ちよつと外で寝てるから」

「ああ じゃあ俺も」

「なんだよもう食べねえのか？」

「お前の腹と一緒にすんな」

俺らは外に出て丁度いい日陰で寝ることにした

十分後・・・

何かが吹き飛ぶ音がして目が覚める

「ん・・・」

起き上がり周りを見渡すと近くで寝ていたゾロがいない

家の中も確認したがルフィもナミもない

とにかく吹き飛んだ音がした所にいつてみると

民家等がバラバラになっている

その吹き飛んだ道をたよりに進んでいく俺は

騒ぎ声が聞こえる・・・撃て？

はぁメンドイけど人助けもいいかもな

騒ぎの方向へ俺は走った

「ナミ！てめえどういうつもりだ！」

真下までつくと怒声が聞こえる

登るとルフィがオリの中でナミの後ろには海賊共が剣を持ち飛びか

かっている

「ちっ」

俺は舌打ちをして助けに向かう

「レース!!」

「よ ルフィ!」

すると右からゾロが・・・

「レース!! お前左をやれ!俺は右をやる!」

「ゾロも!!」

ルフィは満面の笑み・・・たくよ

ナミの足元に棒が転がっている それを拾い右から振るう
鈍い音とともに吹き飛ぶ

「ガッ・・・」

「おいおいおまえら」

「女一人に何人がかりだ?」

「大丈夫か ナミ?」

「え ええ・・・」

「レース ゾロ よくここがわかったな
死ぬかと思った ここからだしてくれ」

「なんでオリの中に入ってたんだ?」

「お前なあ 遊んでんじゃねえよ」

敵陣はざわざわと五月蠅いな

「ゾロだと?」

「あいつ今ゾロって・・・」

「お前がゾロか?海賊狩りの口口ノア・ゾロ 首でも取りに来たか
?」

「興味ねえな」

「お前がなくなると俺はあるねえてめえを殺せば名が上がるしなあ
・・・死ぬぜ?」

「ひゅー ゾロ君かつこいい〜!」

「てめえは黙ってる!」

「はは」ゾロは短気だなあ・・・

赤鼻は短剣を指に挟んで構え

ゾロは三刀流の構えを　へえあいつ三本か

「ハデに死ねえ！」飛びかかる赤鼻にゾロも飛び体を斬り刻む
ほーすげえ腕前だ　ってかこいつよわいなあ

「てごたえのねえ野郎だ」

うん？敵陣をみるとクスクス笑っているやつばかり

「船長が殺されたつてのに笑ってんじゃねえよ」

「！？ゾロ！」

俺は咄嗟にゾロの後ろにいき手を突き出し防ぐ

バラバラにされた赤鼻の腕が浮いてゾロを攻撃しようとしたからだ
当然つきだした手は貫くが短剣だったからゾロには当たらなかった

「レース！！！」

「てめえ・・・悪魔の実か？」

「ご名答俺は　バラバラの実　を食ったバラバラ人間だ！」

「へえお前『も』か」

「なんだあいつ化物か!？」

ルフィは驚くがゾロはそうでもなかった

「お前も食ったのか？」

「ああ　俺も食ったぜ　超人系ではないがな」

「自然系か？動物系か？」

「動物系だ」

「ほう　じゃあおい見せてもらおうか？」

赤鼻は構えをとる

「バーカ　気付け」

「はっ？」

さっき貫いた手を見せる

傷が治っているだけだ

「自然じゃねえのに傷が!？」

「まあ次回のお楽しみってことで」

「レース！」

「あいよー！」

ゾロの言葉に反応して俺はルフィのオリを担ぐ話している隙にゾロが大砲を赤鼻達に向けていた

「ナミ！」

「分かってるわよ！」

マッチで火をつけて点火

「さいならー！赤鼻さん達！」

「てめえ誰が赤はっ・・・！！！」

爆発音と共に俺らは飛んでおりる

「ふう一件落着・・・かな？」

「まだだ ルフィをオリからださねえと」

「うははは わりいな」

「ふう疲れた」

ルフィをおろし休んでいるとルフィが犬とじゃれはじめたそしてナミが来て

「オリの鍵 もってきたわよ」

「おお サンキュー」

ルフィの目の前に投げるが犬が鍵を飲み込んでしまう

「おいおい・・・」

ルフィは鍵を吐き出さそうとする その時老人が近付くするとこの犬の事について語りだした

俺はめんどいから聞かずに寝ようとした

だがドスンドスンと五月蠅い足音？がする

「ま まずい猛獣使いのモージじゃ！」

「猛獣使い？」

でけえライオンの上に誰かが乗っている

あいつか・・・猛獣使いモージは

「ロロノア・ゾロ！お前の首を取りに来た！」

「あ？」

「ゾロく出番だ」

「俺はこいつに興味はねえ 相手にするだけ時間の無駄だ」

「じゃあ俺がやる」

「お前オリに入ってるのに戦えねえだろ・・・」

「なら俺だな」

「お前を殺しても名は上がらん」

「まあいいじゃねえか 俺を殺せたらゾロと戦わせてやるよ」

「おい勝手に決めんな！」

「おいおい 俺が殺されっかよ」

「俺は猛獣使いモージ！」

「俺はブラッド・レース 暇つぶしにお前を倒すから よろしく」

第二話 くオレンジの町

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7499p/>

ONE PIECE 鬼としての本能

2010年12月31日02時34分発行